

# サーサナ

第32号 仏暦2558（西暦2015）年9月1日

---

## 往生は喜び？悲しみ？

キリスト教の牧師さんの中には、信者さんが亡くなった場合、「召天おめでとございます」とお祝いの言葉を述べる方がいらっしゃる、と聞いたことがあります。理屈としてはたしかに、キリスト教徒にとって死は終わりではなく神の国に召されることですから、これは喜びであるはずのことです。とはいえ、そんなに素直に喜ぶこともできない、どうしても悲しみが先に立つ、というのが人間的な心情でしょう。

仏教でも同じことがいえます。死は現世でのお別れとして悲しみではありますが、同時に極楽浄土への往生として喜ぶべきことでもあります。（もちろんこれは信心が前提となります。信心なくして往生はありません。）

親鸞聖人は、弟子の明法が亡くなったと知らされた時、「明法房の往生のこと、おどろきもうすべきにはあらねども、かへすがへすうれしく候ふ」と手紙にしたためられています。また別の弟子・平塚の入道の往生についても「めでたさ、もうしつくすべくもそうらわず」とあります。

有縁の方の往生を「うれしい」「めでたい」と言い切れるのはすごいことだと、現代の私たちは感じますが、それは私たちの死に対する感性が鈍くなってきている証拠かも知れません。あまりにも現世主義的になって、現世がすべて、という感覚からは、往生に対する実感が失われ、「死んだらお終い」になってしまったのではないのでしょうか。

ただ、親鸞聖人は単純に弟子の死＝往生を喜んでいるのではないと思われる。というのは、別の弟子（覚信）が亡くなった時、側近の蓮位は、聖人が「御涙をながさせたまひて候ふなり」と証言しているからです。聖人の人間性がうかがわれるようです。

歎異抄の第9条には、唯円が「念仏を申していても、浄土に参りたいと思う心がわいてこないのですが？」と親鸞聖人に尋ねたところ、聖人は「私も実はそうなのだ」と答える場面があります。喜ぶべきはすのこを素直に喜べない、それは煩惱をかかえた人間の偽らざるすがたでもあります。

## 法要行事のご案内

各法要・行事に必要な勤行本は、お持ちでない場合は当寺より進呈または貸与いたします。念珠は必ずご持参ください。また肩衣の着用を推奨します。肩衣とは浄土真宗の仏事における正装で、本山また当寺でも授与することができます。

### 九月 秋彼岸会

彼岸とは、覚りの世界＝涅槃のことです。これに対して、私たちが暮らす現実世界を此岸といい、此岸から彼岸に渡るのが「波羅蜜（はらみつ）」です。



- ❖日 時 9月20日（日）午後2時～4時
- ❖内 容 勤行（観無量寿経訓読、正信偈）、法話
- ❖持ち物 勤行本『真宗法要聖典』、念珠
- ❖法 話 当寺住職
- ❖記念施本 池田勇諦『親鸞聖人と現代を生きる』（東本願寺）

### 十月 報恩講（ほうおんこう）

報恩講とは、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人（1173-1262）の御命日にあたり、宗祖に対する報恩謝徳をあらわす法要です。浄土真宗では最も重要な法要で、「お仏事」といえば報恩講のことをいいます。

- ❖日 時 10月29日（木）午前10時～午後3時
- ❖内 容 午前：勤行（正信偈真四句目下・念仏讃洵五）および法話  
おとぎ（昼食）  
午後：勤行（文類偈真四句目下・念仏讃洵五）および法話
- ❖持ち物 『報恩講勤行テキスト』、念珠
- ❖法 話 前田和丸師（一心寺住職）
- ❖記念施本 武宮聰雄『非核非戦 法蔵菩薩の涙』（東本願寺）、  
法語カレンダーほか



## 十一月 参拝ツアー

昨年同様、本山・東本願寺報恩講へ参拝します。昼食は、ミシュラン三つ星をとった「菊乃井本店」にて。午後は京仏具の老舗「小堀」の工房を見学し、金箔押し体験をしていただきます。

- ❖日 程 11月25日（水）日帰り
- ❖交 通 全行程をジャンボタクシーで移動します
- ❖行 程 7:30 教心寺出発  
9:30 本山報恩講参拝→12:30 昼食→15:00 仏壇工房見学  
19:00 教心寺帰着
- ❖費 用 17,000円（当日お支払い下さい）
- ❖申込み 電話・メール・FAXなどによりお申し込み下さい。  
先着9名までとさせていただきます。

## 帰敬式受式おめでとうございます

6月28日、下記の二名が、当寺第七回帰敬式を受式され、法名授与されました。今後とも、仏法聴聞・仏道精進されますことを願いたします。

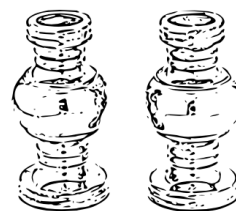
釋正義 釋尼心靜

## 清掃・おみがき奉仕

皆様方のご奉仕をお願いしております。終了後はお茶とお菓子でおくつろぎ下さい。雨天の場合は中止とします。

- ❖9月12日（土） 午前8時から約1時間 境内の草取り（雨天中止）
- ❖10月12日（月） 午前9時から約2時間  
仏具のおみがき

華瓶（けびょう） ⇒  
水を供える器です。香木である檜の小枝を差します。なお檜がない場合には檜に似た青木の小枝で代用します。この水は「浄水＝浄土の八功德水」を象徴します。



## ユニセフ募金

8月10日、皆様からお預かりした浄財17,411円を公益財団法人・日本ユニセフ協会へ振り込みました。累計では229,647円になりました。ありがとうございました。

---

## 東本願寺リーフレットより 朱印をしない理由

---

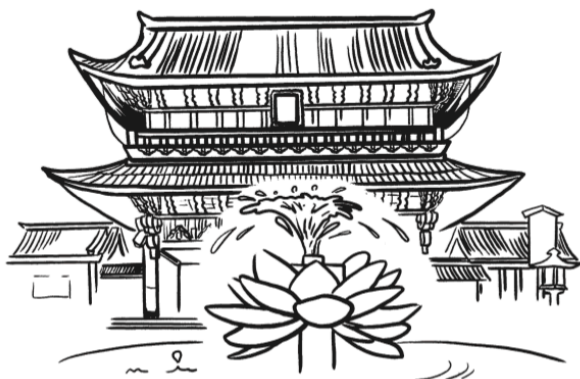
そんなに古い歴史をもつわけではありませんが、参拝した記念に朱印を押してくれるところが数多くあります。寺の名前や仏教の言葉などが添えられる場合もあります。

回ったお寺の数だけ朱印が増えていくことは楽しみでありましょう。また、八十八箇所とか三十三所というように決められた場所をすべて回ったときには、何らかの達成感があることもわかります。

でも、ちょっと待ってください。お寺とは朱印を集めるためにお参りするところなのでしょうか。それならば、一度朱印をもらえば、二度とお参りすることはないでしょう。大事ななお参りしたことがあるかどうかではなくて、お参りして教えに出遇（あ）ったかどうかです。また、どんな教えに出遇ったかということであるはずです。

浄土真宗の宗祖である親鸞聖人は、師の法然上人との出遇いをとおして、生涯を「ただ念仏」の教えに生きられた方です。それは念仏を称える時、どんな者も決して見捨てることのない仏の世界が、いつでも憶い出されてくるからでした。逆の言い方をすれば、貪（むさぼ）りや憎しみの心に翻弄（ほんろう）されて、何が大切であるかを見失っていく自分であることをよく知っておられたからでした。

私たちはどうでしょうか。一度お参りしたから大丈夫とか、教えはこの前



に聞いたからもう聞かなくてもいい、などといえるのでしょうか。さまざまな問題が次々と起こってくる状況の中で、何を本当の拠（よ）りどころとして生きていくかが、いよいよ問われてきているのが現代です。お寺を回ったというような達成感に腰を落ち着けてしまうのではなく、教えを聞き続けようと立ち上がる必要があるのではないのでしょうか。

大谷大学教授 一楽 真

---

**真宗大谷派 教心寺**（名古屋教区第30組）

編集発行人 釋眞式（山口眞一）

468-0026 名古屋市天白区土原3丁目205番地

電話：801-1381 FAX：807-1198 電子メール：kyosin@nagoya30.net

URL <http://www.nagoya30.net/temple/kyosin/>